

眺める富士山：景観と表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小二田, 誠二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8006

第4回 眺める富士山 ― 景観と表現 ―

小田 誠二

1 はじめに

世界遺産のおかげで、静岡は今一大富士山フリーバーに見舞われています。そして、日本中どこでも富士山展をしているという感じですが、確かに富士山に関する芸術作品は非常にたくさんあって、芸術の源になっています。

今日のオープニング画像に使っているのは、不思議な浮世絵です(図1)。「Landscapes of Japan. Calendar for 1902」と英語が書いてあります。これは今日実物を持ってきているのですが、はがきほどの、小さいものです。浮世絵好きの方はご存じと思いますが、「ちりめん本」というもので、浮世絵を圧縮して小さくすると細密画になるのです。「一九〇二年(明治三十五年)一月」と書いてあって、東京の長谷川竹次郎という人が発行者になっています。中はほとんど東京、京都、大阪のありがちな

風景で、そこに小さいカレンダーが入っているもので、中も英語なので、輸出用だったと思います。「ちりめん本」は輸出用にものごく人気があったのです。たまたまこの暮れに入手したのですが、いいタイミングだと思って、お宝自



図1 1902年のカレンダー

慢に持つてきました。

この赤いのはしみですので、気にしないでください。明治のものだということ、輸出するということもあって、右開きとか、日本の本と反対の開き方をしています。現在の横書きの本と同じ開き方です。この風景ですが、どこから見たものか分かりますよね。静岡の人だと多分これを見て何となく分かると思います。ここに松があるのは何か変な感じがするのですが、ここが宝永山です。宝永山が描かれているのが一つ大事なことです。こちら側に張り出しているものがあるのは、これが三保半島だという意識があるわけです。その奥に帆掛け舟があるということは、これは清水港の奥の方から見ているのです。これが実は日本の富士山の風景画の型どおりの風景です。だから「日本の風景」というカレンダーが一九〇二年に作られたときに、表紙がこれというのは誰も疑わなかったのだと思うと思います。これを見て、これは相模湾とか東京湾とかいいう人はいないだろうというくらい、日本人にとつてもなじみの風景だし、外国人にとつても同様でした。ありきたりといえはありきたりな風景ですが、こういうものが描かれるようになったのは雪舟以来であるということが、展示会でも何度も説明されています。

今日の話は前半と後半に大きく分けて、前半は主にどこか

ら見るかという話、後半はどのように見えるかという話をした
いと考えています。

2 三保の松原と富士山―現在の「松原」から 富士山は見つらい

インターネット上に、富士山の世界遺産の構成要素の図面
があります。富士山が画面中央にあつて、駿河湾があつて、三
保は画面左下にあります。これが駄目だと言われる原因だつ
たのです。距離が離れ過ぎて飛び地で、こんな所を一つの構
成要素にしてどうするのかということ。それでも三保が入
ったのは、いわゆるロビー活動の成果でしたが、富士山に
とつて三保は何なのかという問題は、実はそんなに簡単ではな
いと私は思っています。

今日はどこから見るかという話で、ここから出発したので
すが、三保から富士山を見るといふのは、見つらいですよ。
三保でも、例えば海水浴場がある先端の方に行けば、よく見
えます。しかし、現在の羽衣の松がある辺りに行くと、富士
山は半島の裏側になってしまい、羽衣の松を見て富士山が見え
るまで、富士山の方を見ながら歩いていくと、もしかしたら
水に入ってしまうかもしれません。静岡市の広報で、今年の一

月最初の号の表紙が三保の富士山だったのですが、あれは海上から撮った写真です。海上からであれば、三保の松原と富士山がきれいに撮れるのですが、羽衣の松辺りであまりまいこと富士山と松を入れようとすると、テトラポッドが写り込んでしまします。それも問題ですが、何よりも、あそこから富士山を見るという感覚が、そもそも違うのではないかということを考えていたのだと思います。

今回、県立美術館で非常に重要視された富士山三保松原図屏風です。富士山が右隻にあります。三保の松原が左隻にあつて、左隻の左手が駿府城らしいのですが、三保が左隻の右手中央部に入っています。その下側と右隻の下側に海があります。さらにその下側に三保の松原があつて、左隻の途中で切れています。羽衣橋のようなものが昔もあつたということでしょうか、橋がありますね。いずれにしても、三保の松原の先端に羽衣の松があるように描かれています。こうなっているという事は、どこから見たものかという事、これは太平洋上空何百メートルから見ているのであつて、三保から見ているのではないことは分かりますよね。実は、三保から富士山を見た絵はほとんどないと思います。では、芸術の源泉としての三保というのとは何なのか。「羽衣」という謡曲の主人公で、天女の羽衣を取ってしまう伯梁(はくりょう)という人は、三保の漁師の

ようです。そして、三保から富士山の方に天女が最後に飛んでいくので、舞台は当然のことながら三保ですが、物語の舞台が三保であることと、富士山のビューポイントであることはあまり関係がないのではないかと思います。

一つ問題になるかもしれないことがあります。次の図は伊能忠敬が描いた伊能図で、国会図書館のHPから無料ダウンロードできますので「大日本沿海輿地全図」・第一〇七図

駿河・遠江(遠江・御前崎・駿河・静岡・蒲原駅)を探してみてください。これを見ると少し気になることがあるのです。「三保松原」と書いてあるのは先端部分ではなく、先端のかぎ状の地形の付け根辺りです。ここは、今の折戸とか、静大の教員の官舎などがある湾の内側なのです。ここに伊能忠敬が「三保松原」と書いた理由が私には分かりません。ここが三保の松原で、先端の方は三保の松原ではないということではないと思います。ただ、江戸時代の三保半島は、村があることはあるのですが、かなりの部分が神領だったりするので、恐らく松原はかなりあつたのだと思います。つまり、現在の三保の松原の松は非常に限られていて、半島の外側にありますが、今は住宅街や工場や港湾施設になつている所まで松原だったのだろうと考えれば、三保の松原の中に富士山のビューポイントがあつても不思議はないと言えます。それがいつからどのくらい人が住

むようになったのかという問題もあるのですが、もう一つ考えたいことがあります。

今日のプリントに最勝閣のことが書いてあります。最勝閣は昭和の初期まであった、国柱会という現在でもある宗教団体の建物です。このてっぺんの部屋は待勅殿で、天皇がやがて三保を日本の首都にするためにそこにやって来るのを待つ場所と言う意味です。国柱会は日蓮宗の一つの組織なので、日蓮宗を国教として、清水を首都として天皇がここに来るというために準備した建物です。国会図書館の近代デジタルライブラリーで大正八年の『清見瀉案内』というガイドブックが見られますが、最勝閣は三保半島の内側にある貝島に描いてあります。羽衣橋と言って、清水側から三保半島に渡る橋が大正末期から昭和の初めぐらいに数年間だけ存在しました。ここから真つすぐ行くと三保神社を通って、羽衣の松に行くように渡してある橋ですが、その近くに最勝閣がありました。この位置は、清水港の真ん中です。そこに恐らく意味があるのだろうと思っています。この地図は非常に面白くて、後でもう一回話題にしますので、少し記憶にとどめておきましょう。

3 『万葉集』に詠まれた「田子の浦」はどこか

今見た地図の興津の所に「清見瀉」と大きく書いてありますが、それを過ぎていくと、薩埵(さつた)峠と書いてあります。また、地図の一番右端、由比川がここにありすから、由比駅はこの地図の範囲外ですが、ここに「田子浦」と書いてあります。「えっ？」という感じですよ。そう思わない人は古典を勉強してきた人です。これも重要で、後で順を追って話しますので、憶えておいてください。

ここで、和歌で有名な「田子浦」はどこかという話にうつります。現在の田子浦港は沼川を開いて造ったもので、現在は河口に巨大な碑が建っています(図2)。この日、私は朝早くに天気がいいから今日の資料のために写真を撮ろうと、まず浮島ヶ原に行きました。浮島ヶ原は世界遺産についての何の話題にも上っていませんが、古典文学では非常に重要な場所です。富士市と沼津市の境界線辺りにあって、国道一号線で行くと、富士山を左側に、田んぼばかりの広い所があります。あの辺全体が沼地だったので、浮島ヶ原といわれて、愛鷹山が右側からせり出してくるまでの間、ずっと何の邪魔もなく富士山が見える非常に有名な場所でした(図3)。そこに行つて写真を撮つて戻つてきて、今度はここで写真を撮ろうと思つて



図2 田子の浦歌碑



図3 浮島ヶ原自然公園案内板

行くともう雲がかかっていたという残念な写真です。ここに山部赤人の「田子浦ゆ　うち出でてみれば・・・」という歌碑が建っているのですが、左端の説明板が大体1mぐらいいの高さです。で、この碑がいかに大きいか分かるでしょう。万葉仮名と読み下しと現代語訳が付いていて、ちょうどすき間から富士山が見えるようになっていきます。

この説明書きには、「富士山を望む歌は赤人が政府の役人として、東国に赴く道すがら田子浦から仰ぎ見た富士の姿があまりにも雄大で美しく神秘的であったため、その印象を詠んだ叙景歌の最高傑作であるといわれています」と書いてあります。これは大概何かの機会に教わりまし、同じ歌が百人一首では「田子浦に」となっていることも教わります。「ゆ」というのは、「従」という字が書かれるのですが、それは経由するという意味で、万葉集の歌だと「田子の浦を通つて」と訳す必要があるので、「田子の浦に」ではないのです。ということ、田子の浦はどうもここではないらしい。

このことは今ネットで検索しても分かりまし、私が今回参考にした、久保田淳という先生の『富士山の文学』の中にも書かれています。が、「田子浦」は奈良時代の文献で、庵原郡にある、つまり富士川よりも西側にあるのが明らかなのです。もちろん富士川を挟んで両方という言い方もあるかもしれませ

んが、現在の和歌の研究では「田子浦ゆ打ち出でてみれば」という言い方は、近畿の人が駿府を通り越して、江尻を越えて、興津の方に行くと、それまで何度も見えていた富士山が見えなくなりまし。その後、富士山がもう一回見えるのは薩埵峠を越えるときです。実は奈良時代はまだ薩埵峠の上の道ではなく、海沿いの道を通っていたはずなのです。海沿いの道は明暦の地震のときに隆起してしまいましたが、それ以前は、海岸沿いを興津の方から薩埵峠を左に見ながら行くと、突然、富士山が目の前に現れるのです。由比のパーキングエリア辺りの風景を思い出してもらえばいいと思います。あるいは東海道線だと、興津と由比の間のトンネルを越えると見えてきます。



図4 二代豊国画「百人一首絵抄 山部赤人」



図5 清見湯 万葉歌碑

ただ、鉄道は正面になってかえって見にくいかもしれません。高速や国道一号線で行くと見やすいと思いますが、そのときの突然目の前に現れる富士山を詠んだ歌だと言われています。

この歌は、田子浦が現在の位置だと全くおかしいのです。田子浦から打ち出でて見るというのは、船に乗って外に出て富士山を見る感じがするのですが、その前に後ろを見れば富士山があるでしょう。三保の松原も薩埵峠も、興津側から上がると突然海が開ける風景がありますが、現在の和歌の研究では、そういう驚きの歌であると考えた方がいいのではないかなっています。

ついでに言っておくと、芸術の源泉ということで、今日は広重も北斎も持つてこずにこういう美人画を持つてきました(図4)。ここに「山部赤人、田子浦に打ち出でて……」という札が載っているのですが、この絵は分かりますか？ 浮世絵とはどういうものかを説明するときにこれをよく使うのです。ここには「田子の浦の風景は非常に美しいが、美しいという言葉を使わずに描写だけで書いている。富士山の眺めのすごさが分かるので、そういうところを味わうべき歌だ」と書いてあります。それはいいとして、この絵は何を味わうべきでしょう。これは「見立て」と言って、浮世絵が非常に好む技法で、富士の高嶺に雪が降っている絵なのです。今、雪が降っているのはここ。富士

額ならぬ富士うなじでしようか、そこにおしろいをパタパタやっているのが「富士の高嶺に雪は降りつつ」だというふうに遊ぶのです。浮世絵を見に行くときは、この人がきれいかどうかとかだけではなく、技術的なことを見るときにも、それにもまして、こういう遊びの要素を見ていただければ、浮世絵を楽しめるのではないかと思います。

ところで、さつき田子浦と一緒の地図に清見潟があります。清見潟も東海道の歌枕というか、あの辺の歌枕として非常に重要ですが、清見潟は実は富士山が見えません。清見寺の真向かいにある碑には「庵原の清見の崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし」と書いてあります(図5)。富士山では無く、三保半島の縁を詠んだ歌のようです。ここにはもう一つ、「月の秋 興津の借家 尋ねけり」という句碑があります(図6)。興津の借家を探してもらっている人は正岡子規です。正岡子規は病床にあつて、「興津で死にたい。興津でどこか住める所を探してくれ」と言い続けて、結局、高浜虚子たちの反対にあつて、興津には移動せず東京で死ぬことになるわけです。興津に行けと言ったのは伊藤左千夫で、そのためにこの句碑の周りには野菊がたくさん植えてあります。松山の野菊と、いろいろな所の野菊です。しかし、高浜虚子は「興津には野菊はない」と言ったという話が残っています。非常に悲しい話



図6 清見潟 正岡子規句碑

なのですが、明治35年に36歳で正岡子規は興津には来ることなく、東京で死にました。

この話をなぜするかというと、同じ明治三〇年代にもう一人、静岡で命を落とした若い文学者がいました。次の絵のサインに「大野村従(より)」、一字抜けて、「華寺」と書いてあります。ここに入る字は「龍」という字です。「大野村の龍華寺から眺めた風景」。この龍華寺というお寺が大野村にあったのですが、現在は清水区村松で、ソテツで有名な所です。ここには高山樗牛(ちよぎゅう)のお墓があります。高山樗牛はまさに清見潟辺りに療養に来ていて、この辺をうろろろするのですが、三保などにもよく行っていて、三保で泣き明かしたりもしています。そういう中で自分のお墓はここに作ってほしいと言って、非常に眺めのいい所に作っています。この絵は去年の九月に出た「芸術新潮」で初公開になった絵で、次回ここで講座を担当される湯之上先生が一番関わっていらっしゃる、葦山の江川文庫から出てきた新発見の、江川坦庵の絵です。この風景でも、右に三保が入っていて、左が薩埵峠側で、手前に清見寺があるはずなので、清水が手前側ということになります。この風景が古来たくさん描かれているのです。こうやって風景画を見ていくと、同じようなビューポイントのものがたくさんあります。

4 文豪が最期の地に願った富士の眺望

ここで、曲亭馬琴の文を見てみましょう。曲亭馬琴は、隨筆の中で何度か富士山のことを書いています。旅行の途中で駿府まで行って、そこから行くとうするのですが、「凡此山の眺望は駿州有度郡大野村(府中より三里)龍華寺の本堂より見るを第一とす、清見寺これに亞(つぐ)」。実際には清見寺からは見えないと思いますが、「原よし原の間又好景、三島沼津より見れば大にひきく、岩淵薩陀峠より見れば、胸につかへるようにて凄じ貌姑峯(はこね)は齋の川原より壹の平らまで、ふじを右に見る、一の平最よし、西行法師の、山の上なる山は、ふじの根とよみたりしは、此所なるべし」。つまり、三島沼津側、原吉原もよいけれども、第一の眺望は龍華寺の本堂から見る富士山であると。これは馬琴が駿府の人聞いたらしいのですが、およそ間違っていないくて、当時の人のほとんどが常識的にこう思っていたようです。

日本平は簡単に登れる山ではないのです。私より年上で静岡に長い方はご存じと思いますが、日本平パークウェイができるのは昭和三〇年代です。それまでは車で日本平に登るのは無理で、歩いて登る山なのです。それが名勝に指定され、毎日新聞の新日本観光地百選に選ばれ、パークウェイができ、

日本平ホテルができ、ロープウエーができてというふうを整備されていくのは、海外からの観光客を含めて、日本を観光でもっと盛り上げようという機運ができてくる高度経済成長期のことです。それまで日本平は観光で多くの人が気軽に訪れる所ではないので、勢い有度山の東麓、清水側の斜面がとにかく眺めのいい場所なのです。そういうわけで、あの辺にある幾つかのお寺がビューポイントになっているのですが、その中で観富山、龍華寺が一番重要な山だったということです。

この辺から見る風景がいいのですが、高山樗牛はそれを何と言ったか。龍華寺のホームページから高山樗牛の遺言を取ってきました。「先づこの度は墓地のこと申上候。駿河国清水港附近龍華寺と申すは、三保の松原より富士山への眺望本邦無二と存じ候。私も数回遊覧し、当に慕い居り候土地に有之候。もし少生死後に相成り候へば、右龍華寺に埋葬相願ひ度候。素より故郷には先祖の墳域も有之候こと乍ら、彼の陰鬱な禅宗寺は私の気には如何にしてもかなわず、是非是非右願ひの通りに成し被下度候」。

樗牛は『滝口入道』を書いて文壇のヒーローになったのですが、療養に来ています。療養地文学というのは、軽井沢に行くか、湘南辺りに行くか、それについて静岡です。正岡子規は最初湘南に行けと言われるのですが、湘南はもう観光地化され

てうるさくなっていたようです。明治二三年に東海道線が通って、それでも興津まで東京から六時間で、弟子たちは六時間も汽車に乗せられないと考えたそうですが、興津は一大観光地として開発が進もうとしていた新しい観光スポットだったのです。清水もそういう場所として認識されています。高山樗牛の話もし始めると切りがなくなりますが、本邦ボーイズラブの元祖みたいなところもあって面白いので、樗牛をもっと静岡の人はクローズアップすればいいのと思います。

ここの風景は、清見寺が左側の隅にあつて、その右に薩埵峠があります。それから三保半島が右側から少し出てきます。その奥に富士山があります。この風景が非常に美しいバランスを保っているのです。日本平の展望台から見ると非常に分かりやすいと思います。このバランスを描いた文章の最高峰は、私の個人的な意見では、三島由紀夫の『豊饒の海』の最後、「天人五衰」です。『豊饒の海』は四巻の大河ドラマで、一八歳ごとに死んでいく四人の少年たちの生まれ変わりの物語で、もともと平安文学から取っている話です。いちいち考えさせられる話ですが、その最後の舞台が静岡なのです。駒越という静岡と三保を分けている小さい峠のような所がありますが、現在は海側に道ができてほとんど人が通らなくなっています。そこにかつて通信所があつて、清水港に入ってくる船をチェックして

いました。その通信社は現在でもあるのですが、建物はなくなつて、今は灌漑用のタンクがあるだけです。今は何年か前にきれいな案内の碑が建ちました。今は建物が多いので清水港の水面はあまり見えませんが、三島由紀夫は次のように書いています。

「堤の上には乏しい松が、新芽の上に赤いひとでのような花をひらき、帰路の左側には、さびしい小さい四弁の白い花びらをつらねた大根畑があり、道の左右を一系列の小松が割っていた。そのほかはただ一面の苺のビニールハウスで、蒲鉾形のビニール覆の下には、夥しい石垣苺が葉かげにうなだれ、蠅が葉辺の鋸の刃を伝わっていた。見渡すかぎり、この不快な曇つた白い蒲鉾形がひしめいている中に、さつきは気づかなかつた、小体な塔のような建物を本多は認めた。車の停めてある県道のすぐこちら側、異様に高いコンクリートの基底を持った、二層の木造の白壁の小屋が見られた。見張り小屋にしては奇聳であり、事務所にしては貧寒だつた。一二層とも、窓は壁面の三方に悉くつながつていた」。これが通信所の建物で、その下の妙に高いコンクリートというのは現在でも残っていますが、中が水槽になつていて、イチゴのために水を供給する所です。「かえりみれば、足下の県道のかなた、ところどころに鯉幟の矢車をきらめかせた、新建材の青い屋根瓦の町の東北に、清水

港の錯雑としたすがた、陸のクレーンと船のデリックが交錯し、工場の白いサイロと黒い船腹、しじゅう潮風にさらされている鉄材や厚いペンキ塗装の煙突が、一群の機構は陸にとどまり、一群は幾多の海を渡つて来て、一ト所に落ち合い睦み合うあの露わな港の機構が遠く見られた。海はそこでは、寸断された輝く蛇のようになつていた。港のむこうの山々のずっと上方に、雲の中から僅かに山巔だけを覗かせた富士があつた。あいまいな雲の中に、山頂の白い固形が、あたかも一塊の白い鋭い巖を雲上に放り出したように見えた。本多は満足してここを去つた」。

この通信所にいる少年が透という第四巻の主人公になるのですが、これが本当に本多の幼馴染だつた清頭の三回目の生まれ変わりなのかということとは分らないままです。この最後に清水港のぐちゃぐちゃした風景が描かれていて、「海はここでは寸断された輝く蛇のようになつていた」というわけです。つまり、三保半島が抱き込んでいるために、渦巻状に海が光っているのです。それが円環を成していないで、寸断されているのです。円環を成す蛇であれば、ウロボロスという自分で自分をかんでいるような蛇の話になるのですが、そうはならない。で、その向こう側に富士山が見える。次回、湯之上先生が富士山曼荼羅の話を読まれると思いますが、その富士山曼荼羅の現代

版のようなものをここに描いて、そこには季節的にこいのぼりがあり、現在の清水港があるというぐちゃぐちゃの中に寸断された蛇が見える。この寸断された蛇は、実は生まれ変わりの物語がもうすぐ終わることを示しているのだろうかと思います。ウロボロスが断ち切られるわけです。そういう意味でこの三島由紀夫のこの文章、この描写は『豊饒の海』の風景描写の中でも非常に重要だろうと私は思っています。

そして三保半島はその風景の中で中央にあるのです。最勝閣はこの風景の真ん中にあります。三保半島がなければこの風景はないのです。

つまり、三保の松原は富士山を見る場所、ではなく、富士山の風景の中心である、ということ。三保に行つて頂きたいことは、そこから無理して富士山を眺めるのではなく、古来描かれてきた風景、あるいは日本平、龍華寺あたりから見た雄大な風景の真ん中に、今自分がいる、と言うことを意識すること。自分は風景の、自然の一部であると観じること。それこそが、東洋的な風景の味わい方です。

北斎が描いた富士山の画集に、どこから描いたかを全て地図上に示したものがありますが、かなり遠くからも見えています。三保を飛び地として世界遺産にするのではなく、私はそれを全部世界遺産にすべきだと思います。富士山だけが大事な

ではない、われわれ日本人は富士山を眺められる場所全部が重要なことをよく知っています。

富士山はもちろん登る人もいます。また、このシリーズの一回目から三回目の理系の人たちは富士山そのものが研究対象です。今回、私は眺める富士山と言いましたが、富士山に行つたらあの形は見えないのです。これは、スカイツリーをどこから見るかという話と一緒です。スカイツリーはふもとまで行くと、分からなくなってしまう。浅草寺から見ると浅草寺の建物とスカイツリー、隅田川から見ると隅田川とスカイツリー。スカイツリーの見える場所がスカイツリーのビューポイントです。そうすると富士山だけを守るのではないし、三保を守るのでもなくて、富士山が見える場所は全部世界遺産だと思ふぐらいにしないと、全体が見えなくなってしまう。

5 家康の都市計画（駿府と江戸）

もう一つだけ今の話からつなげていきます。静岡の町の構造は十字路が東西南北ではなく斜めになっているので、理解しづらい。静岡の人によく実験的なことを言うのですが、伊勢丹のある札の辻という交差点に立って「北に行ってください」と言ったときに、市役所の方に行くか、浅間神社側、駅から離

れる方向に行くかによつて、ある程度、年齢差が出るのではないかと思ひます。現在のわれわれの地図では、静岡駅は北口、南口ですから、北という駅から離れる方向で、北にどんどん歩いていくと伊勢丹があるというイメージです。しかし、江戸時代の地図では、駿府城が一番上にあるので、北ではないのですが、頭の中の北はお城の方なのです。ですから、伊勢丹の所に立てば、北側は市役所の方向です。なぜそういう変な地図になっているか。何にもない土地に新しく都市をつくらせたら、奈良や京都のように南北にきちんとした条里制にすればいいのに、静岡は斜めになっている。その理由が、実は東海道を西から宇津ノ谷峠を越えて下りてきたときに、正面に富士山が見える、その富士山と駿府城がどのように見えるかという事を意識して町を設計したという説があるのです。私の昔の授業でそれが本当か、とにかく歩いてみたり、コンピュータで建物を消してみたりしたことがあります。

江戸にもそういうふうに着景としての富士があつたはずで、そのことについて、小島烏水という人が書いた「不尽の高根」という文章があります。小島烏水はものすごい実業家で、私にとっては浮世絵研究の第一人者です。広重の代々のことは小島烏水の本で知るので、この人が外国で働いていて、帰朝したのがその年三月であつたというところから始まって、江

戸の市民生活の中にいかに富士山があつたか、そして現在の都市計画の中で富士山を気にしなくなつていくことにある種の憤りを持つて書いているのが、この「江戸と東京の富士」という文章です。

「もはや都市経営論者からも、富士山の眺めを取り入れることによつて、日本国の首府としての都会美を、高調する計画も聞かされなくなつた。ゼネヴァには、アルプスの第一高峰、モン・ブランを遥望(ようぼう)するところから、モン・ブラン通りの町名ありと聞くものから、今日の東京では駒込の富士前町だの、麴町の富士見町だのという名を保存することによつて、富士山が市民の胸に蘇生しては来ないようだ」。このように、私たちの山としての富士山が江戸人にとつてどんなに大事だつたかを書いていきます。

小島烏水は、富士山にどこから登るとか、どこから見るとどう見るとか、たくさん富士山に関する文献を残しています。日本百名山のようなことを明治時代にやつているすごい人です。これは青空文庫などで読めます。他のものも明治時代のもので、今、国会図書館のホームページなどでかなりのものが読めるようになりました。研究環境は激変していますので、興味がありましたらそれぞれご覧いただければと思います。

6 太宰治『富岳百景』から―富士山の頂角問題など―

後半はもう少し、見る・眺めるとはどういうことかという話をしようと思います。静岡で富士山が見えるのは一〇〇日だという話をよく聞きますが、それはほとんど冬で、夏の間はほとんど見えません。

実は中日新聞が木曜日に記事にしてくださいだったので、それをご覧になった方は、今日のネタの一つが分かっていると思いますが、先日、吉田町で講演をしたときに、二回に分けて、一回目の最後に即興で富士山を描いてもらったのです。それを集めて次の二回目に配りました。これが後半の一つの重要なポイントです。

富士山で文学作品というと太宰治でしょう。「富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいいていの絵の富士は、鋭角である。いただが、細く、高く、華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七

度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。たとへば私が、印度かどこかの国から、突然、驚にさらはれ、すっと日本の沼津あたりの海岸に落されて、ふと、この山を見つけても、そんなに驚嘆しないだらう。ニッポンのフジヤマを、あらかじめ懂（あこが）れてゐるからこそ、ワンダフルなのであつて、さうでなくて、そのやうな俗な宣伝を、一さい知らず、素朴な、純粹の、うつろな心に、果して、どれだけ訴へ得るか、そのことになると、多少、心細い山である。低い。裾のひろがつてゐる割に、低い。あれくらゐの裾を持つてゐる山ならば、少くとも、もう一・五倍、高くなければいけない」。太宰治だねという感じです。

この後、御坂峠にしばらく滞在する間に起こつたちよつとしたことがあります。実はこれも私は知らなかつたのですが、これが太宰治の文章ではないことをご存じでしょうか。太宰治は丸パクリをしたのです。プリントの「頂角」と書いてあるところに、「試に画家の筆に成る富士山を吟味するに、其頂角が實際を表はすものは殆んどない、凡て鋭に過ぐるのである。例へば広重の富士は八十五度位、文晁のは八十四度位で、秋里籠島の名所図会中の図は各地の画家のスケッチに依るものであるが何れも八十四、五度で、大概の図は此の位に角度に描かれるのである。けれども陸軍の実測図により東西及南北に断面

図を作つて見ると」という文章から取つています。

実はこれを書いているのは石原初太郎という人です。太宰治は『富岳百景』でこの後山梨のお嬢さんと見合いをするのですが、その見合いをして結婚をする相手のお父さんで、山梨にいる富士山学者です。初太郎さんが何を言いたいかというと、「真をのみ写すは写真で、絵画は想像を描くものである」という議論もあるが、吾人は今これを論議するのではなく、ただ絵画に富士山頂の真を描かれているものがないというのみ」。絵は当てにならないということです。それで『富士山の自然界』という本には、実測図の断面図が入っているのです。検索していただく、国会図書館のデジタルアーカイブで見られます。皆さんが多分実際にやられても、吉田町の皆さんと同じように、実際の富士山より鈍角に富士山を描く人はあまりいないと思います。一二〇度以上開く絵はなかなかないです。なぜそうなるのかは心理学的な問題だろうと思いますが、このことについて問題にした人が太宰や石原さんよりもっと前にいます。

7 外国人の見た富士山と富士山の頂角問題、続き

まず問題にした人がエドワード・モースです。モースは湘南で弟子たちを連れて合宿のようなものをした時に、弟子たち

に記憶スケッチをさせるのですが、みんな本当の富士山より急になるのです。明治の初期に外国人が、富士山の絵は不思議だと既言っているのです。モースはこのことを問題にしているのですが、これと絡めて面白いのは、二〇一二年、NHKの「にっぽん微笑みの国の物語」という、エドワード・モースとイザベラ・バードという明治初期に日本にやって来た2人の外国人を通して日本を見るという番組がありました。梅雀さんが進行役で、後ろに二枚の富士山の絵が使われていました。一つは明らかにジャングル探検のようで、海に船がいるのですが、これは相模湾か江戸湾です。イザベラ・バードの職業はよく分かりませんが、旅行ライターのような人で、旅行記をイギリス本国に送つて、そこで出版されるようなことをやっているのですが、日本にやって来て富士山を見て最初に描いたスケッチがこれです。暗い未開の地で、人がいるのかいないのかも分からないような、例えばターザンの冒頭のような感じですが、それに對し、もう一枚は、日本を去る前に描いた絵です(ともに『日本奥地紀行』より)。山がなだらかになっているだけではなく、下に人の暮らしがあります。その番組は梅雀さんの後ろにこの二枚の絵が大きくして飾つてあって、この間にイザベラ・バードに何があつたのかを話す番組でした。

幕末から明治にかけて日本に来た人たちの証言集は、渡辺

京二が『逝きし世の面影』という本でたくさん集めています。それを見て、日本人の素晴らしさもあるのですが、江戸湾に入ってきた船がびっくりするのは、緑が多過ぎて建物が見えないらしいこと。今からは想像つかないことですが、お寺や神社、屋敷に植物が生い茂っていて、高い建物がないので、建物がないのではないか、本当にこんな所に人が住んでいるのかと思うのだそうです。ところが、実際に上陸してみると、すごい人がいる。その当時ロンドンと並ぶ大都會で、幕末ですから一〇〇万都市になっています。そういうところにまず驚くわけです。それから下水道が完備していて、上下水道がある、ごみがない。もつと前のシーボルトたちは、とにかく雑草を採取

したいのに、雑草が生えてなくて困ると言ったというほど、ものすごく清潔好きで、また、江戸時代は封建時代といわれませんが、女性や子供がこれだけニコニコしている国も珍しいと言っています。イザベラ・バードも東北や北海道(蝦夷地)でいろいろな嫌な目にも遭っていますが、結果的には日本を非常に気に入って帰っていきます。そのときにあの絵を描いています。一人の女性が到着したときの富士山と、去っていくときの富士山をこんなにはつきり描き分けたということ、分かりやすい例として出てきています。

また、オールコックは外国人で最初に富士山に登ったといわ

れる人ですが、この人の登山記の表紙もすごく急な富士山ですが、一緒に行った画家にはこう見えたのでしょうか。「こう見える」というのが大事で、絵の中の富士山は急なものになってしまうのです。

富士山はどこから見たらいいのかという最初の話に戻りますが、ここにもう一回小島鳥水の名前と、もう一人、若山牧水の名前が出てきます。若山牧水は沼津港に牧水記念館があるように、あの辺に住んでいたのですが、牧水がまた富士山のことについてはうるさいのです。牧水は今日の話の流れに逆らう人で、富士山の見え方について非常にはつきりとしたポリシーを持っています。「なかで私の一番好きなのは田子の浦の富士である」。この田子の浦は現在の田子の浦です。「田子の浦といふと何となく優美な——例へば和歌の浦とか須磨の浦とかいふ風の小綺麗な海濱を豫想しがちであるが、事實はひどく違ふ。意外な廣さ大きさを持った砂丘の原であるのである。九十九里が濱の荒涼は無いが、東海道沿ひの松並木から續いて、ばらばら松の丘となり、やがて草も木もない白茶けた砂丘となり、ところどころうねりを起しながらおほらかな傾斜をなした大きな濱となつてゐるのである。濱の廣さは、ばらばら松の丘から浪打際まで六七町から十町あまりあるであらう。西はすぐ富士川の河口となり、東はずつと弓なりに

四里近くも打ち續いた松原となつて居る。松原の東のはずれには狩野川の河口があり、河口に近く沼津の千本濱があるのである。薩埵峠などを含む由比浦原あたりの裏の山脈は富士川の西岸で盡き東の岸からは浮島が原の平野となつてずっと遠く箱根山脈の麓まで及んで居る。その平野の東寄りの奥に愛鷹山(あしたかやま)がある。沼津あたりからはこの山が丁度富士の前に立ちはだかつて見えるのであるが、田子の浦から見るのだと、恰かも富士の裾野の東のはづれに寄つてしまつて、殆んど富士の全景に關係がなくなつてゐる。つまり廣大な裾野の西のはづれから東のはづれを前景にして次第に高く鋭く聳えて行つた富士山の全體が仰がるわけである。富士山は何處から見ても正面した形で仰がる山であるが、わけてもこの田子の浦からは近く大きく真正面に仰がると思ひがする。豊かに大地に根ざして中ぞら高く聳えて行つた白麗朗のこの山が恰も自分自身の頭上へ臨んでゐるかの様な親しさで仰がるのである。何の技巧裝飾を加えぬ、創造そのまゝの富士山を見る崇嚴を覺ゆるのである。繪でなく彫刻でなく、また蒔繪や陶器の模様でない山そのものの富士山を仰ぐことが出来るのである。それから、乙女峠に行つたときの富士山の風景について、これも同じく御殿場側で、「何のさえぎるものもなく、裾野が左右ともきちんと下まで見える」。

牧水は、清水側から見る富士山はいろいろ邪魔があつていかんと言ふのです。こう言う人はなかなかなくて、たいいていは、清水港、三保、清見寺、薩埵峠があつて、その奥に富士山があるという水墨画の、本当にそのまま、いわゆる絵になる風景として描かれるべき富士山がいいと思ふのです。江戸時代に馬琴が富士山を見るのは龍華寺が一番だと言ひましたが、日本三景みたいなものが形成してくる過程で、やっぱり清見潟が日本一の風景なのです。清見潟は必ずしも興津側というよりは、清見潟を含む風景ということで、やっぱり清水港の一番奥から見た風景、さっきのちりめん本の表紙の絵のように見える富士山が日本一なのです。天橋立などよりもいいと。江戸時代の、風景を論じている本の中では一番ということです。部門別になつて富士山というのが一個立つてしまうと難しいですが、清見潟は日本一の風景だと江戸時代に言われているらしいです。しかし、若山牧水はどうも何もない富士山が一番広く、高く見えると言つています。牧水にとつてはそういう、混じりつけ無しに、広く高く見えることが大事だつたようです。

8 富士山はどこから見ると一番高いか

私もネットでこの講座のために予習したのですが、富士山はどこから見ると一番高いかというサイトがあつて、現在どこですというのが載っています。この人はすごく、富士山の山頂はふもとより遠いから、遠近法的に細くなるということと、山頂の位置と自分の位置の高さと距離を割り出して、見かけ上高く見える場所はどこかとあらゆる角度から検討しているのですが、「現在の最有力候補は毛無山です」と。そのためにコンピュータのカシミールというソフトを使って検証しています。平面としてここから見たときの高さを測ると、実は本当のこととは分からないので、奥行きがないといけません。そうすると富士山はこう見えるはずという、何メートル以上離れるとこういうふうに見えるのは見えるというような、ややこしい話です。

富士山の角度も、本当の角度なのか、遠近法的に先が細まっているのか。だから一二〇度というのは正しいけれども、見た目の角度はもっと急かもしれないのです。ところが、それは本当にわずかなことで、石原さんや現在その研究をしている人、『富士山地図を手』という本を書かれた伊藤さんという人がやっぱり研究されているのですが、写真をたくさん照

らし合わせて重ね合わせても変わらないと言っています。つまり、その程度で見た目の角度が急になることはない。科学的に言えば、富士山の角度は実測図と大差ないのです。詳しくはネットで見てください。

富士山は不思議なもので、高く見えるときと低く見えるときがあります。近く見えるときもありました。観光バスで三保に行くとガイドさんが絶対言うのが、沈んでいくという言い方をしますが、駒越側から三保の方にバスが入っていくと、だんだん富士山が低くなっていくのです。あれは坂なのですかね。そういうのを私も観光バスの人に聞いたことがあります。科学的な見え方もあるので、それはいまだにやっている人もいることを押さえた上ですが、富士山はそれ以前にわれわれの心の中にあります。

9 校歌の中の富士山〜理想は高し

県立中央図書館から借りてきた富士宮市教育委員会「富士山文化藝叢書」の「校歌に詠まれた富士山」、これはかなりいい資料です。『富士山と校歌』というのは清水銀行が出しているのですが、静岡、山梨両県の校歌に富士山はどのように歌われているか。これは常葉大学が短大かの先生が書かれたもので、

もともと山梨の出身の学生の卒論で扱われたものに静岡を補足したものでした。

今日のプリントの最後にのせたのは静岡の校歌です。旧制静岡高というか、現在の静岡もこの校歌です。一番、「岳南健児一千の理想は高し富士の山、八面玲瓏白雪の清きは我等の心なり」。その後がすごい歌詞ですが、現在はほとんど歌われないういキベディアには書いてあります。この一番の歌詞は素晴らしく富士山ですね。「岳南」とは富士山の南のことで、「健児一千の理想は高し富士の山」、富士山の枕言葉は高しです。富士山の高さはわれらの理想の高さで、富士山の白い雪はわれわれの心の清さです。これらの本では軍国主義時代から民主主義時代が変わっていく中で、校歌の歌詞がどのように変わっていくかを研究されているのですが、驚くべく理想の形としての富士山があつて、どんなに世の中が変わっても富士山は理想の比喩となっています。それがこういう研究から分かります。

それから、三重県の人を作ったウエブサイトに、「校歌・故郷の山」が各県別に載っています。例えば浜松市でも校歌の中に富士山は出てきます。和田小学校、和田東小学校、篠原小学校、西小学校、城北小学校、龍禅寺小学校、三方原小学校もあります。あとは赤石岳です。そういうふうに富士山ではない山も含めて、山が出てくる校歌をひたすらデータベース化する

るという途方もない仕事をされている方がいます。全部のページを見たところ、関東はほとんどの県に富士山があります。栃木県はなかつたように思います。私は千葉県出身ですが、千葉県でも鴨川で外房といわれる外側なのですが、実は鴨川から富士山が見えるのです。「房総半島の断層の所に鴨川の長狭平野があるので、向こう側に富士山が見える日があります。木更津など内房側なら東京湾越しに富士山が見えるので、歌詞の中にたくさんあります。茨城もあります。当然神奈川県や東京もあります。もちろん山梨、長野、愛知、三重などもあります。場合によると見えなくても、富士山を入れている歌詞もあります。

例えば富士中央小学校。「世界の人があこがれる、富士の頂仰ぐとき、希望は雲のようにわく」。「平和の光」とか、富士という言葉と一緒にどんな言葉が出てくるかをこれだけ集めると、すごいことが分かるのです。そういう素晴らしい研究を無償でやっている人がいるのは本当にすごいことだと思います。

10 まとめ

先ほどのサイトを見て、歌謡曲に富士山はあるのかと調べてみました。意外と富士山は出てこないのではないのでしょうか。

「歌謡曲、富士山」と検索したら、真白き富士の根のあの歌が出てきたのです。あれは歌謡曲なのですかね。あれは美しい富士山と少年の悲劇が対になるのですが、歌謡曲に富士山は出てこないようです。何か思い出す歌はありますか。なぜ富士山が歌謡曲にないのかというと、理想的過ぎるせいではないかと思えます。ただ、歌謡曲に山が出てこないわけではなくて、例えば天城越えというと、何か暗い感じ、人生がはまっていてしまいそうな感じがします。富士山はやっぱ理想の山なので、富士山のような演歌は考えにくいのかと勝手に思っています。これは本当かどうかの検証はできません。

では、童謡の中の富士山はどうか。「ふじの山」というのが正しい曲名らしいですが、巖谷小波、さすがですよ。これは静岡の町中を歩いていると、交差点で止まるごとにこの曲が流れます。「頭を雲の上に出し、四方の山を見下ろして、かみなりさまを下に聞く」、素晴らしいですよ。「海は広いな、大きいな、月は昇るし、日は沈む」に匹敵する素晴らしい歌詞だと思えます。これには何かそういう変なメッセージや理想が入っていないのも素晴らしいと思います。言葉で分かりやすく表現している。かみなりが下でと。着物とすそに例えている二番もいいですね。

そういえば、こういうチラシが皆さんの新聞に入っています

んでしたか。「ただ飾るだけ、富士山のパワーが呼び込む金運力」こんなにあく毎月富士山が」、それぞれ意味があるのです。「一月は黄金の日の出。ご来光によって黄金色に染まった雲はまさに金運。そして赤く染められた富士山が未来の躍進を象徴しており、事業や商売の成功はもとより、出世栄達をかなえてくれることでしょう。」以下一二カ月分のご利益が書いてあります。しかもこれが一四八〇円。富士山は永久にこういうふうに使われる運命にあるので、仕方がないことです。

芸術文化の話と少し懸け離れた話をしてしまいました。「富士三十六景」も出しましたが、そういうのはある意味どこでも見られるし、あんまり皆さんがよく知っていることをここで話すのも失礼かと思い、それなりにトリビアを探してきました。

ここから見えてくる大事なことがあります。私は言語文化学科というところに所属していますが、文学研究や芸術研究が技術的なものや人生を深めるとかいうことだけでなく、もっと幅広いものとして、言語的な文化がある。例えば、われわれは富士山を見ているのだけでも、富士山を通して何を見ているのか、あるいは、富士山に何を託しているのかという研究は、自然科学でもないし、美術でもないし、文学でもないのです。それは文化学としてわれわれがやることなのです。

今日の後半でお話ししたことがそうなのですが、われわれは富士山をありのままには見ていません。そもそも、ありのままに見ることがあるのかも分かりません。去年の三回の講座は、本当の富士山、リアル富士山を科学的に研究してきたのだと思いますが、われわれはそういうものを分かっているまいなくても、別のものとして富士山を見ているのです。その富士山に何をわれわれは託しているのかを見ていくと、富士山がどうして信仰の対象になつていくのかという次回の話にもつながっていくかもしれないし、ものを見るとは何かということについて考えるヒントが出てくるかもしれません。富士山の話はすぐいろいろな広がりがあり、面白いと思います。

今、静岡で大ブレイク中の池ヶ谷知宏さんというデザイナーが、めくると富士山が中に出てくるTシャツを三七七六円で売っています。最新作はギターの青いピックです。弾けば弾くほど削れていつて先端が白くなるのです。人によって癖があるため、雪の積もり方が違う。真ん中に「Iry hard」と書いてありますが、一生懸命一つのことに取り込んでいると富士山が現れるというように、一つ一つの作品にメッセージが込められていて、アクションすることによって作品が見えてくるということとをずっとしています。私の授業にも出てもらったことがあります。このように、富士山は今、クリエイションの世界でも材料と

して使われているのです。これも「理想は高し、富士の山」です。そういうふういろいろな場面で富士山が出てくるのは、長い歴史もありますが、そういう偶然の計らいなのか、ああいう形の山がここにあつてということだと思います。われわれは富士山をいろいろな投影として、象徴として見ているのだということです。これは数え上げれば切りがなくて、こんなものもある、あんなものもあるというのがたくさん出てくると思います。今日は、その中で私の気が付いた範囲で、あまり知られていないと思うものをなるべくお話しさせていただきました。ありがとうございます。

『講師紹介』

小一田誠二（静岡大学人文社会科学学部 教授）

一九六二年千葉県生まれ。学習院大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程中途退学。（主な仕事）『死霊解脱物語聞書』（白澤社）監修。『円朝全集』（岩波書店）に参加。